ラグジュアリー：ファッションの欲望

ART 4.11～(Sat)

ロココからシャネル、コムデまで。ファッションの歴史はラグジュアリーの歴史だ。

古代エジプトで生まれた赤い染料が日本に渡来したのはなんと3世紀、卑弥呼の時代だったという説がある。国家が誕生すると権力者が求めるのは特別な装い。「もっと豪華な服を」という欲望が砂漠にキャラバンを走らせ、危険をおかして商船を出港させたのだから、ファッションってつくづく業が深い。

権力とともにあった「これ見よがし」な装いに始まり、「あえてドレスダウン」なシャネルの時代、大量生産時代だからありがたがられる「一点もの」の贅沢…と時代によって「ラグジュアリー」もさまざま。展示される服からその変遷をみていると、ファッションの歴史とは「贅沢とは何か」を考え、創作してきた豊かな時間だったと気づく。

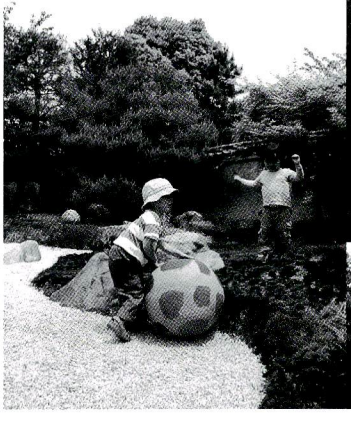
で、あなたにとってラグジュアリーって何？ありきたりなブランド名しか思い浮かばない？ そりゃ貧乏臭いこって！（沢田眉香子）

ドレス（ローブ・ア・ラ・フランセーズ） 1770年代（テキスタイル：1750-60年代）
京都服飾文化研究財団所蔵、広川泰士撮影

■「ラグジュアリー：ファッションの欲望」
■ 京都国立近代美術館
■ 4.11（sat）～5.24（sun）
■ 問い合わせ ☎075・761・4111／月休
■ 一般2000円

京都現世美術館 2009 ～お寺で芸術を愉しむ～

ART 5.1～(Fri)



凛とした、清々しい新緑の中で、十余のアートが息吹を生む。

立派な博物館や美術館でもなく、街の小さな画廊でもなく。お寺で！芸術に触れられる６日間がやってくる。'06年春からスタートし、今回で４年目５回目を向かえる同展は、早くもG.W.の風物詩となりつつある、と言い切ってもあながち誇張ではない。

今回も、イラスト、日本画、陶芸、写真といった様々な分野から約16名の作家を招来。日替りワークショップには、一保堂茶舗、木版画竹笹堂、文學界新人賞受賞の作家・藤野可織と谷崎由依…といった興味のアンテナが振れるラインナップ！ そのほとんどが入場料のみで参加できる太っ腹さ。また、「喫茶はなれ」によるお座敷カフェも憩いの場を提供する。

畳の部屋で、縁側で、庭を見ながら、いつもより少しだけゆるりと流れる時間に身を委ねれば、非日常的空間で、アートが暮らしに寄り添う快感が得られるだろう。（山田涼子）

■「京都現世美術館2009～お寺で芸術を愉しむ～」
■ 5.1（Fri）～6（Wed）／10:00～18:00（入館～17:30）
■ 入場料：500円
■ 禅居庵　京都府京都市東山区大和大路四条下ル4丁目小松町146　http://www.tooma.info/

月刊 芸妓自身!!

～京女・真箏のactive life～

MAKOTO ブログ 京女のつれづれ草
http://www.cafeblo.com/kyoto/

MAKOTO 率いる京都発信エンターテイメントチーム HP
http://www.chimalabel.com

「芸妓さんに人気の髪飾り」の巻

今まさに、「都をどり」のお稽古中。ところが、髪飾りに目がチラチラ。「お!! パリジェンヌ多し」なんどす。おパリ旅行中にも訪れました「アレクサンドル ドゥ パリ」はモナコのグレース王妃、ジャクリーン・ケネディ夫人、オードリー・ヘップバーン、ソフィア・ローレンをはじめ、世界の王侯貴族やトップレディたちが顧客に名を連ねるヘアアーティスト「アレクサンドル」が展開する高級ヘアアクセサリーのブランド。これを使てるお仲間が多いのんどす。

正直、「おみやげ～」なんて言うて気軽に購入できる品ではおへん!! 私もその中で一番カジュアルな、ジーンズなどにも合いそうなのを自分用に買っただけ。カチューシャやバレッタ、シニオン用のネットのついたリボン等々、色もバリエーション豊かで黒から淡い色…、女性の美を作り出すアイテムとして上品かつラグジュアリーどす。キラキラ光るゴージャスなデザインのライトストーンはすべてスワロフスキーのクリスタル、手の込んだ丁寧な手作りヘアーアクセです。

私もおパリでしか見た事がなかったので「京都は高島屋の二階にありますぇ～」と情報を耳にし、早速見に行きました♪

女心くすぐる品々が春の新作と共に並んでました～。「パリでもっと買っておけば良かった～っ」と素直に思った…。

美しい物を目にすると心も美しくなるそうです。というわけで、夏が来る前に涼し気な話題をひとつ…、っと「美」への向上心湧きますぇ～。